

素晴らしき道草

川 合 省 三

大阪府立急性期・総合医療センター脳神経外科部長
基礎課程小委員会 委員

世の中、IT化時代とやらで何もかもが便利になった。政治・経済の世界を中心に、下手をすると医学・医療の世界にまで、目先の結果だけを求め自らの利益を優先するという現在の風潮は、従来の日本人にはない、誤った個人主義、利己主義ではないかと懸念される。

どんな職種にも一人前の専門家になれる便利な早道はない。脳外科医然り、診療情報管理士然りなのである。筆者が医師になって二年生の20歳代、大学病院での無給医局員の頃、無医村診療所への一人勤務を命じられたことがある。脳外科専門医を夢見る青年医師にはとても辛く、特に外国留学の同期生と比較してあせり狂ったことを覚えている。だが、この時に患者さんから教えられ、必死に学んだ、「孤独の決断」「弱者への真のヒューマニズム」は決して無駄にならず、何年経っても身にしみている。孤独の中で読んだ小説も血となり肉となっている。無給医の生活を補うための休日・夜間の当直アルバイト、深夜の病理解剖、動物実験の後始末など、大学の医局制度のなかで、先輩の命ずるままにひたすら働き続けたが、そのときは「道草」に思えたことも今から考えると無駄になったことは一つもない。一般の外科と同じく、肉眼のみの脳手術は名人芸といわれ、我が国の成績も先進国に遅れをとっていた時代に、脳外科医を志した筆者がその夢を断念しかけた頃、顕微鏡手術が我が国に導入された。大学を離れその第一人者に学ぶ機会を得た30過ぎが脳外科医としての再出発となり、その後30年間ひたすら走り続けられたのは、それまでの道草とも思える期間に溜まっていたエネルギーのお陰であろうか。

管理士を目指す方の中には、卒業後直ではなく、社会経験のある人もいることでしょう。それまでの人生を「素晴らしき道草」へと転換して、がんばってほしい。誰でも近道をして目標に到達しようとするのが人の常である。だが、楽に手に入れたものは実力とはなりにくい。解らぬことがあれば、コンピュータのみに頼らず、書店・図書館に行ったり、専門家にきいたり時間を惜しまず学んでほしい。時には楽しみながら。手間をかけるほど身につくのだ。虫捕りが趣味の解剖学者 養老孟司氏という「虫捕りながら登山すると、ひたすら歩く山岳部よりも元気。楽をしたら駄目だが、楽しむことが大切。回り道も捨てたものじゃない」と。

管理士を志す方は自らの損得のみを基準にするのではなく、与えられた課題には先ず取り組んでみよう。回り道でもいいではないか。脳神経外科と診療情報管理・ICDとの「二足のわらじ」を忘己利他の精神で履き続けるのが、筆者の生きる道と確信している。どちらかが「素晴らしき道草」となることはとても考えられないのである。資格修得後の皆様と共に忘己利他の心境で良い仕事が出来るとの来ることを願うばかりです（日本診療録管理学会理事）。